

グローバル通信

2014.12 vol.35

Ryukoku University
GLOCAL TSUSHIN

年々時間が過ぎるのが早く感じるようになり、今年もあっという間に師走です。私生活、院生生活ともにとても忙しい時期に入ってしまった。年末に発行される今回のグローバル通信では、そんな忙しさを乗り切って昨年論文を書かれた先輩方の経験談、そして先日行われた藤森でのまちづくりワークショップの様子、院生合宿の様子を紹介しています。加えて、龍谷大学政策学部では学部生と院生が共に学ぶ機会も多数設けられています。その一つとして今回は「発展演習」を取り上げました。後期、政策学研究科のさまざまな形での学びを是非ごらんください。

2014 年もあと少し、体力と気力をめいいっぱい使いながら、また寒さやインフルエンザにも負けないよう今年度を走りきりましょう。
(編集部)

「市民をど真ん中に」据えた市民協働のまちづくりを	1
若者の成功を促すプログラムと課題解決の手助け	1
修士論文執筆記	2
発展演習チームと藤森学区が協働してワークショップ	3
発展演習	3
奈良県生駒山麓公園 / 講演プラス酒宴	4
修了生の今	4
事務局インフォメーション	4



「市民をど真ん中に」据えた 市民協働のまちづくりを

松山 正治
(福岡市長)

龍谷大学と福岡市は、大学間連携事業として取り組んでいる「政策マーケティング」事業を展開する中で、「未来を描く!福岡山 100 人ミーティング」や「市民アイデア買取事業」、「総合計画市民懇談会」など、公共人材の養成という観点から様々な提携を進めてきたことを踏まえ、2014 年 10 月に「地域人材育成に係る相互協力に関する協定」を締結し、更なる連携を深めているところです。

特に 2014 年 10 月に開催した「未来を描く!福岡山 100 人ミーティング」では、無作為に抽出した様々な立場の市民のみなさんに「福岡山らしさって」というテーマで議論いただく中で、学生のみなさんにファシリテーターとしてなごやかな雰囲気を作っていただき、参加された皆様から今後の市政にとって重要なご意見をいただくことができました。

また、他の連携事業として 2014 年 2 月にはドイツのドルトムント工科大学の学生や、2014 年 8 月の JICA 研修で来日された世界各国の国や自治体関係者のみなさんについても、福岡市をフィールドとしてまちづくりについて検討、ご提案いただくなど、北近畿の小さな地方都市と世界のつながりを真剣に考える絶好の機会を与えていただけたと感謝しております。

本市は北近畿の中心に位置し、「北近畿をリードする創造性あふれるまち」を将来像に掲げてまちづくりをすすめてきましたが、長田野工業団地や、6つの特色ある高校、北近畿唯一の 4 年制大学である成美大学、市民交流プラザや福岡山城などの地域資源を活かし、北近畿一円から人・物が集まるまちとなっています。さらに、まちづくりや子育て支援などのこれまでの取組みにより、合計特殊出生率が 1.96 と全国 1888 自治体の中で 34 位という高い水準にあり、今後とも、大学のご助力もさらに得ながら「市民をど真ん中に」を旗印に、行ってみたい・住んでみたい・住み続けたいまちづくりを進めていきたいと思っています。

また、今年の 8 月豪雨災害で大きな被害が出た中、多くの大学から学生、先生方にボランティアとして参加いただき、早い復旧ができたことについて改めて感謝申し上げます。

若者の成功をうながす プログラムと課題解決の 手助け

安保 千秋

(公益財団法人 京都市ユースサービス協会理事長)



欧州で発展しています若者施策を「ユースサービス」といいます。その理念を元に公益財団法人 京都市ユースサービス協会は、主に京都市を中心とした若者の育成と支援に取り組んでいます。当協会は発足から数えて 26 年目を迎えます。昭和 60 年代は若者のグループ活動が盛んだったこともありグループワークやグループダイナミクスなど若者を集団として育成する手法が取り入れられてきました。また、若者自身のコミュニケーションやリーダーシップなどのスキルや体験活動なども集団の中の個としてとらえる傾向にありました。しかし、近年ではより若者の個別的な課題に沿った事業が広がっています。

私たちが運営する青少年活動センターでは、若者の自主的な活動を応援する本来の活動はもちろんのことですが、居場所のためのプログラムや中学 3 年生の学習支援プログラムの展開、就労に向けた体験プログラムの実施など、若者個々の課題に合わせた活動が行われています。他に、ひきこもりなど社会生活を営むうえで困難を有する若者やその保護者のための子ども・若者支援事業や、就労にあたって悩みをもつ若者やその保護者の方を対象とした若者サポートステーション事業など、協会の活動は多岐にわたってきています。

このように、役立つ感や達成感、葛藤を経験できるさまざまな機会と場の提供を通して「若者の成功を促すプログラム」と、顕在化した課題に焦点をあて「その課題を解決するための手助けをする」ことのふたつの事業展開が行なえることは、他に類を見ない私たちの強みだと考えています。

京都には多くの大学があり、大学生自身がいきいき活動すること、そして支援者として活躍いただき協力しながら若者の課題を解決することは言うまでもないことです。他方、大学院において支援者自身が、さらに学びを深め実際の活動を検証し、その考え方や施策を整理し言語化することは、大きな意味をもちますし、多くの人にその手法や成果を知っていただくことにも繋がっていきます。

大学院という学びの場での出会い、交流を深めつつ、今後の市民社会のあり方について考えることのできる貴校の研究コースは今後ますます重要になると考え、とても大きな期待を寄せています。

修士論文執筆記

論文執筆中の皆様は今、追いつきの時期です。昨年の論文執筆経験者3人に経験談をお願いしました。また、今年度奮闘中の院生2人の中間報告を終えての感想もあわせて掲載しています。

2014年度前期政策学研究科修士

小田 浩文さんの場合

苦労やコツ

私は消防職員として24時間勤務という特殊性から、勤務の日は丸一日論文という集中ができず、心と体のバランスが崩れ、これをいかに保ちつつ論文作成するかに苦労を強いられました。

コツとして伝えられることは、自分自身が集中できる時間やタイミングは自身が最もよく分かっているはずなので、集中できるフローに自身が身を置けるように実行すること。集中できる時間に邪念が入り込む隙間を作らないこと。私は朝型なので、4時に起床して携帯はOFFにして限りある時間を集中するようにしました。

先輩へのアドバイス

研究目的が明確な方は、その意思や想いを貫いて下さい。後悔することは人生もったいないと感じます。研究目的に迷っている方は、自身が院生に進んだ原点を見つめ直し、自身が突き詰めたいことは何かを自問自答して下さい。出た答えは、どんな苦難でも克服できるはずです。

私は修論作成にあたり、引用文献などを読んでいながら論文を綺麗に納めようと右往左往し、原点に帰ってはまた揺らぎを繰り返してしまいました。しか

し、迷っても諦めない事で結局人生に無駄がないことを感じました。期限を決めて進めることは重要である一方、自身の納得いかない論文なら命を取られるわけではないため、納得いくまで続けたいと思います。ただ、無計画な執筆活動は、結果としてフェードアウトになりかねないため、注意して下さい。

執筆スケジュール

2013年	4月～	文献収集(関係論文、主に総務省・厚労省・内閣府白書など)。
	6月～	8月研修計画に基づき序章作成を行うも、内容に迷いがでる。
	9月～	論文構成に四苦八苦。
	10月～	序章完成。
	11月～	1章完成。
	12月～	2章・3章完成。
2014年	1月上旬～	終了作成し、20日一旦完成するも納得いかず提出見送り。
	2月～	論文構成見直し及び文献追加収集作業。
	3月～	序章、2章完成。
	4月～	1章完成。
	5月～	3章完成。
	6月～	図・表の挿入、16日完成提出。

2013年度政策学研究科修士生

黒澤 英昭さんの場合

苦労やコツ

まず、論文作成が初めてでしたので、何をしていたかわからない時期はとても悩みました。当初は、研究したい内容を盛り込み過ぎて收拾がつかない状態で、特別演習でも自分の思いが伝えられず、7月の中間報告会直後も落ち込みました。

8月頃、テーマを「貧困の世代間連鎖防止＝子どもへの学習支援」に絞り、目次案に沿って書き出しつつ、聞き取り調査を行いました。同じ研究テーマの先輩にも会ってアドバイスいただき、なんとか論文がかけそうなイメージを持てました。

昼休みや電車内などのスキマ時間を捻出し、年末年始の数日間は一人でこもってパソコンに向かい、ようやく論文の形にできました。

先輩へのアドバイス

担当教官とほぼ毎月1、2回面談していただいたことが、適度なプレッシャーになりました。自分の場合は悩みやすく、理想や思いが高すぎると指摘されて、問題意識を絞る、よりシンプルに現実的に課題設定を、とアドバ

イスいただき、8月には具体的に書き始めました。

研究テーマを絞ってからは、軸となる本数冊や先行論文をフセンを貼って読み切り、抜き書きメモをひたすら打ち込み、論文の章立てに沿って並び替えてなんとなく全体像が見えました。最後に、make senseを意識して仕上げました。

自分の頭の中のモヤモヤが一つの形になったことは成果でした。論文集が届いたときは、じわっと感激が込み上げました。関係者の皆様、ありがとうございました。

執筆スケジュール

2013年	5月	特別演習で発表も落ち込み
	7月	中間報告会で発表もまた落ち込み
	8月	担当教官のアドバイスでテーマを絞り、書き始め
	10月	聞き取り調査、並行して参考文献を増やす
	11月	中間発表、論文が約18,000字
	年末年始	論文が40,000字をこえる
2014年	1月中旬	印刷、誤字チェックしてほぼ完成

2013年度政策学研究科卒業生

竹本 真梨さんの場合

苦労やコツ

私は調査先がなかなか決まらず、他の院生に比べてかなり遅れていた為、焦りや不安がありました。しかし、秋にやっと調査先を決め、その後は、地域や関係機関の方々に無理を言って論文の提出ぎりぎりまで、会議への参加、ヒアリング等をさせていただきました。現地調査では調査に入る前に情報収集することはもちろんですが、調査によって新たに出てくる疑問や不足部分を洗い出し、できる限り再度聞き取りやまち歩き等を行い、現地でしか得られない情報や考察を深めていくことが重要だと思います。

先輩へのアドバイス

私は執筆中に指導教官から「修士論文を書くことは社会的コストが掛かるのだから、研究成果を社会へ還元する義務がある」とよく言われました。最初はその意味がよく分からなかったのですが、実際に地域での報告をする機会を頂き、地域や関係機関の方たちは自分たちのこれまでの取り組みについて客観的

な視点を求めていることを知りました。ぜひ自分の研究を執筆だけでなく、調査先やその後の進路・仕事等に活かしていただく。

最後に、自分の研究について3万字も書かせてもらえる機会は、日常生活でそう無いと思います。書き残しが無いよう、定められた書式と範囲内で精いっぱい書ききってください。

執筆スケジュール

2012年度	研究計画書作成、文献資料の収集
2013年上半期	文献資料の整理、研究対象地の選定
	10月 フィールド調査開始(～1月まで)
	11月 関係者へのヒアリング、地域の会議等への参加
	12月 フィールド調査の分析、序章・第1章・第2章執筆
2014年	1月 第3章・第4章・結論の執筆
	3月 調査先での修士論文報告

執筆中の院生の感想

中間報告を思い返すと、私にとって、言葉が一番の障害でした。日本語が母語ではないため、先行研究を読んでも理解するまでに大変時間がかかりました。また、正しい日本語で文章を書くのもすごく苦労をしました。御指導くださった堀尾先生に心から感謝申し上げます。

中間報告で発表することで、3人の先生からは、研究として不十分な点を指摘され、いままでも気がつかなかった自分の問題意識をもっと明確にすることができたように感じています。残り50日で、先生方からのアドバイスを意識して、有意義な研究ができるように、頑張ります。(政策学研究科 李 夢君)

大学院に入学してから9か月が経過した。入学当時は、論文の作法や先行研究の論文検索などを含め、まったく知識のないままスタートし、授業や学生の皆さんに研究に対する考え方や手法などについて学んだ。

修士論文の指導は、5月後半から概ね1か月に1回のペースで本格的にはじまり、論文指導でいただいた課題をこなしながら、授業のレジュメ作成や課題提出などに追われる日々が続き、気持ちの余裕ができたのは、前期のレポートを提出し終わった、7月末頃だった。

夏休みには、論文を充実させるために関係者へのヒアリング等を行い、資料の整理、収集に励み、また、白石教授には、夏休み期間中にも関わらず論文指導も行っていただいた。

修士論文は、白石教授の指導のもとコツコツと積み上げたため順調に進捗しており、中間発表時には、概ね骨子ができた状態で発表でき、副査の先生にもいろいろなお意見をいただいた。今後は、いただいた意見を参考に論文の精度を上げ、体裁を整えたい。

ここまで、熱心に論文指導をしていただいた先生に感謝したい。

(政策学研究科 村山 雅俊)

発展演習チームと藤森学区が協働してワークショップ

藤森学区（京都市伏見区）は、約7500世帯（人口約16,000人）が暮らしている大きな地域で、1600年の歴史のある藤森神社が鎮座しています。他の地域と同じように、これからのまちづくりをどのように進めたいか、が大きなテーマとなっています。そこで、地域の課題を明らかにし、地域に存在する公共施設や空き家をまちづくりに生かしていくため、2014年9月27日に龍谷大学政策学部地域発展演習チームは、藤森学区自治連合会・藤森学区社会福祉協議会と共同で「藤森学区を住みよい町にするために」ワークショップを藤森神社で開催しました。当日は私たちが予想を超えて80人以上の住民が集まり、地域コミュニティや児童館作りを初め、地域交通問題や医療、商店街の問題等地域の様々な問題を15グループに分けて活発な意見交換を行いました。このワークショップは、学区初めての試みであり、住民の皆さんの思いをゼロベースで自由に話し合い、これからのまちづくりの課題を明らかにしたりアイデアを出し合ったりする場となりました。

（政策学部准教授 金紅実）

話し合いの大切さや、手法に関しては授業の中でも学ぶことが多いですが、実践の場となるとなかなか機会を得ることは難しいのではないのでしょうか。今回のワークショップを通じて、ファシリテーターとして自分が事前に持っていくある程度のイメージや知識としての準備の必要性を再確認しました。同時に住民の方々が積極的に話されていたり、地元にある課題を多く把握されている様子を拝見して、話し合いをして「共有すること」の大切さを感じました。

（政策学研究科 植村 暢子）



住民の皆さんとの熱心な話し合いの様子



発展演習

龍谷大学政策学部では、院生と学部生が共に学べる場も多く設定されています。その一つとして今回は発展演習をとりあげ、その紹介を担当の堀尾先生に、また実際に参加している院生、学部生3人に感想を伺いました。

講義概要

「発展演習」は、先輩―後輩、学部生―社会人院生間が互いに啓発しあう、ユニークなゼミです。ディスカッションを重視し、自由なテーマで、調査・視点構築・課題分析・討論などの諸能力を養います。自治体やNPOのスタッフを招聘してお話を聞いたり、現場に出向いてヒアリングしたりもして、現実感覚も養います。2名の教員が対応するので、広い分野をカバーでき、活発な議論の場が自然に形成されます。そのためか、「きつかったけど発展演習で一番成長した」という声もよく聞きます。

これまでのテーマから：京都の農業戦略、非正規雇用問題、地域ゆるキャラの効用、コンテンツツーリズム論、都市部再開発と地蔵盆、象も虎もいない福知山動物園の魅力、自然エネルギーによる地域活性化、町内会と学生、貧困と孤独死、容器包装リサイクルの現状、湯布院の内発型まちづくり、など。

（政策学部教授 堀尾正頼）

学問的な側面に留まらない魅力

私が発展演習を受講するきっかけは至って簡単でした。学部生と合同開講ですので、気楽に受講できると軽い気持ちで受講をしました。しかし、実際は違っていました。発表のことに先生方からの鋭い指摘や的確なアドバイスを受け、時には落ち込み、時には鼓舞されました。特に、堀尾教授のご意見やご指摘には毎回脱帽させられます。また、発展演習の魅力は学問的な側面に留まりません。発展演習の受講生同士や先生方と一緒に飲み会も定期的開催しています。通常の学部生の授業などでは専門演習でもない限りはこまごまの濃い人間関係を築くことは出来ません。しかし、発展演習だからこそ出会えた仲間も多く、より学生生活を豊かに出来たと思います。

（政策学研究科 木村圭吾）

さまざまな価値観に触れる

関心ある分野を主体的に学び深めることができる魅力的な講義です。また、レポート・論文作成における基本を身につけることが出来ます。毎回の講義で、先生のご指摘から研究の課題を確認し、次回の改善につなげます。授業毎に成長することが出来ます。大学院生、先輩方とともに一つの論文を作成する過程では、様々な価値観に触れ、良い経験であると感じています。

発展演習の受講を通して、意見を主張することやレポート作成に関して、自身の成長を実感しています。

（政策学部3年生 道盛萌）

社会が抱えている課題や実態を肌で感じる

この科目では、文献を集めて読み解き、課題を分析し、必要に応じてフィールドワークを行い、成果発表資料の作成や議論を通じて、自分の興味がある分野を研究する科目であります。私は、この科目が最も政策学について研究を行っていると感じています。なぜなら、この科目の一番の魅力は、学生が主体となって地域のさまざまな課題や対応する政策について深く学習・調査・研究をとことん深く掘り下げる事が出来るからです。社会が抱えている課題や実態を肌で感じる事が出来る科目であると考えます。

（政策学部3年生 増田翔太）



発展演習の取材のため尼崎市役所で説明を聞く（白板の前は清水先生）
（2013.5.21;撮影:堀尾正頼）



2014年後期の受講者と教員（金、堀尾）（2014.12.9;撮影:堀尾正頼）

夏合宿

奈良県生駒山麓公園 / 講演プラス酒宴

政策学研究科 赤木 功

去る9月20日(土)～21日(日)、奈良県生駒山麓公園にて、NPO 地方行政研究コースの合宿を19名(院生16名、教員3名)の参加で実施しました。スケジュールは、講演・アウトドア活動・親睦の3分野があり、それぞれ濃い内容となりました。講演は①生駒山麓公園運営団体の1つであるNPO法人NAC酒井理事から「運営にあたっての話、実績について」②生駒山下市長から「積極的な生駒市政の展開」「生駒山麓公園における行政、社会福祉法人、企業、NPOの連携」③生駒市環境事業部堀次長から「NPO法人から、行政に入り、よかったこと、困ったこと」とそれぞれの立場で本音を語ってもらう内容となりました。アウトドア活動では、鶏の丸焼きや豚肉、牛肉、鹿肉の3種バーベキューの夕食、その後、1時間山を歩き、ナイトハイクを実施。大阪を一望できる場所で最高の夜景に思い思いの気持ちを巡らせました。入浴後は、大広間にて、夜中3時～4時頃まで、勉強熱心なのか?それとも発表に追い込まれていたのか?定かではありませんが、講義発表について、ビール、日本酒を飲みながら意見交換が白熱していました。すべてにおいて、年齢に関係なく、積極的に活動した2日間となりました。



修了生の今

松嶋 健太郎 (2009年度法学研究科修了生) 株式会社 PLUS SOCIAL 勤務



龍谷ソーラーパーク

修了から5年 社会的投資をデザインする会社で活動中

修了して、もうすぐ5年。院生の頃に務めていた(特活)きょうとNPOセンターを離れ、2012年から(株)PLUS SOCIALで働いています。

この会社は「社会的投資をデザインする会社」です。財務的リターンと社会的インパクトを両立させる投資のしくみを創出することで、持続可能な地域づくりに貢献しようとしています。手がけた「龍谷ソーラーパーク」はその一例で、手短かに言えば、龍谷大学の社会的責任投資(SRI)と太陽光発電事業を組合せ、その収益から地域社会へ寄付するしくみです。

事業をして収益をあげるということは、その実、地道で容易でないことですが、それができて初めて理想を形にすることができるのだと念じつつ、刺激的且つ実務的日々であります。

事務局インフォメーション

- 修士論文・課題研究及び要旨提出締切
2015年1月20日(火)

- 法学研究科 修士論文・課題研究報告会
日時: 2015年2月下旬～3月上旬(分分野開催)

- 政策学研究科 海外フィールド研究・修士論文・課題研究報告会
日時: 2015年3月14日(土) 9:00～
場所: 龍谷大学深草学舎22号館104教室および105教室

- 修了証書授与式
2015年3月21日(土) 10:30～
場所: 龍谷大学深草学舎顕真館